

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

#### ■田老町漁業協同組合

##### ◆ひたむきな復旧への道筋

岩手県の太平洋に面した市町村の中で、面積、人口ともに最大の町が宮古市だ。

ここ数年の市町村合併により急に大きくなった町だが、市のほとんどが森林で、また、沿岸はリアス式海岸のため平地は少なく、市街地から海岸線に沿って10分も車を走らせれば、わずかに平地にびっしりと住宅や事業所が立ち並ぶ様子を目にする事ができる。ずっと以前からここで辛抱強く生きてきた人々のくらしぶりが窺える。

入り組んだ土地は良好な湾を形成するプラスの面もあり、ここでは古くから漁業が発達してきた。

宮古市の市街地から北へ15キロほどのところ。震災から2年が経過した現在、宮古市の田老地区では、巨大な防潮堤の海側にいくつものプレハブ施設が立ち並んでいた。高さ10メートル、幅2.4キロという世界的にも大型の防潮堤で知られる土地だ。

防潮堤の上に立ち海側に視線を向ければ、田老町漁業協同組合（以下、田老町漁協）が震災後、ひたむきに建設してきた多くのプレハブの姿を見ることができる。湾の北側には田老町漁協の仮設工場や事務所が、南側には組合員である漁師のための乾燥施設の建物がズラリと並ぶ。

湾の水際では何機ものクレーンが真新しい消波ブロックを設置している。失われたものを取り返そうという勢いを感じさせる光景だ。

だが、防潮堤の反対側、陸側に目を向ければ、見えるのは何も無い平地だ。一時、ここを埋め尽くしていたガレキこそきれいに取り除かれたものの、家や建物の土台だったコンクリートがむき出しのまま残り、1年半の間、ほぼ放置されたままだ。その土台もこの間、伸びた雑草で覆い隠されようとしている。田老に来る度に、「ここに住宅が密集していた」と説明を受けるのだが、外から来た人間にとっては町があったことを想像することすら難しい。

精力的に建設が進む防潮堤の海側、そして、ほとんど動きが見られない陸側。復興が一筋縄ではいかないことを象徴する光景だが、そのことについては後に触れるとして、まずはこの間の田老町漁協の復興への取り組みを振り返っていきたい。

##### ◆消火活動に追われた後は漁協の立て直しを

2011年3月11日、田老地区は日本一の防潮堤を乗り越えてやってきた津波で市街地は壊滅した。4千人余りいた地区に住む人のうち、亡くなった人と今も行方不明の人は併せて約180人また、流出した家や建物は900棟ほどにのぼった。

田老地区で地元の主要産業、漁業を支えるのが田老町漁協だ。同漁協が作る「真崎わかめ」は三陸を代表する製品であり、県内はもちろん全国各地に行き渡っている。いわて生協とは、1977年から（当時は盛岡市民生協）35年の取引の歴史があり、日本生活協同組合連合会とも1980年から30年以上の取引の実績を持つ。

震災は、2011年、養殖ワカメの収穫直前に訪れた。

当日、大きな揺れに驚いた田老町漁協の業務部業務課長、鳥居高博（とりい・たかひろ）さんは、地元で消防団を務めていたため、その直後に防潮堤の扉を閉めるために港へ向けて駆けつけ、その後、津波が来襲。危険と紙一重で難を逃れて高台へ逃げ、家族も無事だった。

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

津波に飲み込まれた町のあちこちではガソリンや重油が漏れ出して引火し、火が発生。火の手は山にまで及び、鳥居さんは山火事の消火作業に追われた。

他県からの応援や自衛隊の飛行機による空中消火もあり、何とか鎮火させた後は、休む暇もなく田老町漁協の立て直しに取り掛かった。

防潮堤のすぐ陸側にあった漁協の本部は形をとどめていたものの、2階まで浸水して1階、2階の窓や壁は破れ、中のデスクや書棚は流され押しつぶされ、泥だらけになっていた。

携帯も固定電話も通じず、通信手段は何もない。消防活動や避難所でかろうじて顔を合わせる事ができた知り合いを通して伝言してもらい、何とか漁協の職員たちが本部に集まることができたのが震災から10日後のことだ。

集まった仲間で浸水した本部の後片付けから始めた。屋外は足の踏み場のないほどガレキの山で、片付けても捨てる場所がなく、道路の端に積み上げて何とか自分たちで通り道を作りながら作業を続けた。その後、その年のゴールデンウィーク過ぎまでの約2カ月間、漁協本部や海岸線のガレキや、田老湾のあちこちで見つかった絡まった養殖施設の撤去作業などに明け暮れた。

その間、職員や組合員の消息がわかり始めた。湾のすぐそばで操業していたワカメ加工場では、工場長が亡くなったことが明らかになった。

だが、本格的な安否確認を始められたのは5月になってからだ。本部の片付けが終わり、そこに発電機を設置して電気を通してパソコンを使えるようにしてから、田老町漁協の組合員やその家族の状況を整理することができた。

組合員とその家族の犠牲者は合計87人。551世帯あった組合員の家のうち、約半数が損壊し、963隻あった漁船のうち残ったのはわずか50隻足らず。本部からすぐ近くのワカメの加工場をはじめ、魚市場や製氷工場、ワカメ・コンブの養殖施設、アワビの種苗・蓄養施設など、漁協の施設のほとんどが破壊されていた。町に7カ所あった漁港の堤防や岸壁がことごとく破壊されていた。

#### ◆時間との戦いだったワカメ養殖施設の復旧

漁協本部の後片付けが済んで仕事ができるようになると、鳥居さんは町の漁業を復活させる手がかりを探り始めた。

「時間との勝負でした」という。

田老町漁協の養殖ワカメは、風味があり、肉厚の歯応えが特徴だ。田老地区の海域で作られる「真崎わかめ」は、高級ワカメとして全国的に知られる。1年をかけて育て収穫直前だったワカメはすべて失われた。

田老のワカメの養殖施設は全部で621台あったが、ワカメが育っていたロープ、海上でそれを支えるフロートと固定する海底のコンクリートの重しなど、すべてが津波に持ち去られ、後に湾のあちこちで見つかったものの、もまれて絡み合い使い物にならなくなっていた。

それでも翌2012年の春には、例年通りにワカメを収穫したい。

ワカメの育成には1年がかかる。2011年のうちに準備をはじめなければ間に合わなかった。

ワカメの養殖は種つけから始まる。潜水夫が海に潜って天然ワカメのメカブを採取し、それを紐状の種糸に付着させて発芽させる。培養のため、まず、沖合に仮施設を作らなければならなかった。

施設で発芽させた小さな葉——幼葉（ようよう）のワカメは、次に海上の養殖施設へ移して本格

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

的な育成——本養成を始める。海上に200メートルほどのロープを渡して、そこにワカメの葉が出た種糸を巻きつけるのだ。

幼葉の発芽施設は何とか作ることができたが、海上にロープを渡した養殖施設の設置は簡単ではない。巻きつけは10月から始まる。それまでに何とか復旧させなければならない。だが、当時は「資材も業者もパンク状態」（鳥居さん）、つまり、注文しても資材は容易に手に入らず、資材が揃っても工事してくれる業者はいなかったという。

まともに依頼しても断られるだけだった。つてを頼って資材を確保し、業者を探し出して工事を頼み込んだ。一方では利用できる復旧のための補助金制度を研究して申請書類を作成した。慣れない事務作業が続いた。

何とか439台分の施設建設のめどが立ち、工事を始めることができたのが2011年の8月になってからだ。従来の7割程度の台数だが、これでも秋からの巻き付け作業に間に合えば、2012年度の収穫につながられる。

それでも秋には何とか439台の養殖施設が完成。巻きつけ作業に間に合わせることはできたが、船は依然、足りなかった。個人所有の船はほとんどが失われ、新しく建造を依頼したが、やはり造船会社にも仕事が集中し、いつできるかもめどが立たなかったのだ。

どうにか確保できたのが50隻そこそこ。だが、ワカメの養殖の組合員は70人あまりいる。かつてのような1人1隻にはとても及ばないが、共同で使えば何とか養殖の作業を進められそう。能率が落ちることは覚悟しなければならなかった。

それで終わりではなかった。収穫は2013年春からになるが、その時に、採れたてのワカメを加工する設備が必要になる。

ワカメは生のままでは保存が利かない。収穫後、ボイルして塩蔵し、その後、冷蔵保存する設備がどうしても必要なのだ。

次から次へと振りかかる難問に、鳥居さんら田老町漁協の職員は翻弄されながらも、1つひとつ取り組んでいった。

#### ◆2012年春無事に収穫、ワカメは7割まで回復

足りない船をやりくりして使ったため、予想通り、ワカメの巻きつけ作業は例年ならば11月いっぱいまで終わるところ、12月半ばまでかかってしまった。早く巻きつけたものと、遅く巻きつけたものとは1カ月半の違いがあり、生育にも差が生じる。育ち切ったワカメはその後、枯れるのは早い。施設の7割が回復し、作業を進められても、生育についての不安は尽きなかった。

翌2012年の1月から2月にかけてはワカメの間引き作業が始まる。ロープ上で育つワカメを適正な間隔にするため、ワカメを刈り採り（間引き）育成を助ける。ロープをたくし上げて育ちすぎたワカメを切り取っていく。真冬の作業は厳しいが、ワカメは確かに育っていた。少しだけ安心したと鳥居さんは言う。

だが、加工施設の建設の見通しは依然、立たなかった。そこで建物は魚市場の施設を利用することにした。ここも津波で骨組みだけ残され、壁も天井もボロボロの状態だったが、壁を貼り替え、屋根を修復して、何とか使える状態にした。それができたのが年が明けた2012年3月10日のことだ。

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

ボイルする機械などの加工設備の製造も、メーカーの生産が目一杯の状況で設置し、加工できるまで整備できたのが3月16日。ワカメの収穫は3月14日から始まる予定だったが、幸いなことに海が時化で延び、3月16日が初日になった。ギリギリで加工体制を作ることができたのだ。

「機械を確保しなければならないし、機械を入れる前に、建屋ができていなければならない。とにかくワカメが水揚げされるのはわかっていたから、間に合わせるしかありませんでした」（鳥居さん）

2012年3月16日未明、まだ、夜が明け切らない真っ暗な中、震災後、初の養殖ワカメが水揚げされた。魚市場を修繕した施設は、雪を避ける天井こそあるものの、港側には壁はなく、零度以下に冷え込んでいる外気がそのまま吹き込んでくる。防寒着に身を包んだ鳥居さんら田老町漁協の職員たちは、獲れたばかりの養殖ワカメをベルトコンベアーに運んだ。

黒々としたワカメは傾斜のついたコンベアーを上り、白い蒸気の立ちのぼる煮釜の中へ消えていく。やがてボイルされ、鮮やかな深緑色に変わったワカメが姿を現す。冷水で冷やし、再びコンベアーに乗せてゴロゴロと回るいくつもの重いローラーの下を通過して脱水し、その後、回転するミキサーの中で塩と混ぜ合わせる。最後には大きな容器に移され、そこで一昼夜寝かされる。塩蔵だ。

外は雪で真っ白だ。夜が明けても空も海もどんよりと重苦しく、寒々とした光景が広がる。そんな中で煮釜から立ちのぼる白い蒸気だけが、温かさを感じさせる。鳥居さんら田老町漁協の職員と組合員が歯を食いしばって取り組んできた1年の成果だった。

初日に水揚げできた養殖ワカメは4トン。その後、収穫は徐々に増え、4月22日には45トンにまで増えた。例年は1日に80トン、ピーク時には120トンにもなり、それに比べればまだまだの水揚げ量だったが、収穫は4月20日まで続き、総量は1,500トンに及んだ。例年の7割。震災から1年でここまで回復させた。

#### ◆仮設工場も稼働、2014年には新工場建設を予定

「あっちを直して、こっちを建てて、新しい機械を手配して……。でも、建屋が間に合わない、どうしよう。ずっとそんな調子でした」（鳥居さん）。

綱渡りとも言える1年を経て、田老町漁協はワカメの養殖を再開し、収穫へとつなげることができた。だが、塩蔵したワカメを消費者のもとにまで届けるには、さらに芯取り、選別、包装という過程が必要だった。加工場だ。

湾岸に2つあった加工場もまたすっかり流されてしまっていた。

2012年1～2月の間引きしたワカメを「早取りワカメ」として出荷する際の選別作業は、田老町漁協本所の1階で行なっていた。量はそれほどではないため、臨時の施設でも可能だったのだが、3月から本格的な収穫が始まれば、十分なスペースのある加工場がどうしても必要になる。

これも2011年中に着手し、2012年3月、防潮堤の海側にプレハブの仮設工場を作り上げた。仮設工場の稼働から少し遅れて2012年5月には、隣接してやはりプレハブの仮事務所が新設された。工場のすぐ脇で操業を見守ることができる。これらは全て国の補助事業を利用した。

2012年秋。取材で訪れた仮設工場の中では、ステンレス製の大きなテーブルを白衣姿の従業員が取り囲み、テーブルに広げた塩蔵ワカメの中芯を取り除く作業を行っていた。春に獲れたワカメは塩蔵した後、冷蔵し、需要に応じて1年をかけて加工を続ける。芯を採ったワカメは更に脱水し、



## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

その後選別され、一定の量に小分けして自動充填機で小袋に包装する。

目の前のワカメを凝視しながら作業に集中する人たちは、表情こそマスクに覆われ完全にはわからなかったが、生き生きとしているように見えた。

別の部屋で行なわれていたのが、フノリの選別だ。国産のフノリを仕入れて、袋詰めして製品化する。

「まだ仮設の工場で、元通りに戻ったわけではないけれども、働けることが嬉しい」と、選別に携わる女性は語っていた。

また、別の部屋では、とろろ昆布の製造機が稼働を待っていた。乾燥した昆布に酢をなじませ適当なサイズに切り、不純物を取り除いて固める。それを専用機で薄く切れば、とろろ昆布ができあがる。

ほかにもひじきの選別、袋詰めなども始まり、仮設工場の製造能力は、全体で従来の6割程度にまで生産力を回復している。

「震災前、工場で働いていた人は38人ですが、今は25人。少し足りないですね」（鳥居さん）  
2012年春、仮設工場の稼働とともに、以前から働いていた人に声をかけたが、すべての人が戻ったわけではなかった。家族や家を失った人がいた。田老地区を出て、他の土地に移らなければならない人もいた。

田老湾の南側には、やはりプレハブの平屋が続くが、これは昆布の乾燥施設だ。

養殖昆布の収穫は6月から7月にかけて、また、天然昆布は9月から10月にかけて行われる。

生産者は自分で獲った昆布をこの10畳ほどのプレハブ施設に持ち込み、天井からぶら下がった洗濯バサミにはさんで昆布を吊り下げ、部屋をシャッターで塞いだ後、部屋の奥にある乾燥機で熱風を部屋内に吹き込む。ずっと以前、昆布は天日で干していたが、機械で行えば天候を気にする必要はない。

個人で乾燥設備を所有している人は多かったが、収穫した昆布を運ぶ利便性から、たいいていの方は家も施設も海のすぐそばに建てていた。それらは震災ですべて流されてしまったため、田老町漁協が組合員のために作ったのだ。

漁協で大がかりな施設を作れば良さそうに思えるが、それには大きな投資が必要で、また、施設を有効に利用するには稼働し続けなければならない、維持費が莫大になる。個人の生産者が、自分の力量に応じて収穫した昆布を適宜、乾燥させたほうが効率的で、また、乾燥後の昆布は漁協が集荷後、漁連の入札で価格が決められ、個人の努力が反映される。個人で使える小さな乾燥設備をたくさん作ったほうがいい。

生産者は漁協に加盟する組合員だが、いったん海へ出れば一国一城の主だ。個人の技術や努力が報われ、やる気のある人がより多くの収入を得られる仕組みは、田老町漁協に限らず全国の漁協で共通のものだ。

現在、田老町漁協では、現在、2014年春の稼働を目指して、本格的な新工場の建設を進めている。

今はプレハブの仮設工場で行っている芯取りや選別、袋への包装などの工程は、この新工場1カ所に集約される。また、冷蔵庫、倉庫なども集約する。現在は、工程ごとにワカメをあっちへ運び、こっちへ移しながら加工しているが、工程も倉庫も1カ所に集約されることで、効率的な製造が可能になる。

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

ただ、魚市場の建屋で行った養殖ワカメのボイルや塩蔵工程は、水揚げしたすぐそばにしなければならないため、海のすぐそばに作る必要があり、現在新たに建設中だ。

新工場は、見学者も見学しやすいレイアウトになり、さらに商品開発の部屋もできるという。

「実際にできるのかどうかかわからないが」と断りながらも「せめて地場で水揚げされる鮮魚の一部でも加工したのを作りたい」と鳥居さんは言う。

「ただ、そうなれば今の人数——20 数人では無理でしょうね。新工場になれば加工する数量も増えるでしょうし、地元から人を集めたい。無理であれば宮古（市街）からでも引っ張ってきて、30 人ぐらいの体制にしておかないと回せない」という。

豊富な魚介類に恵まれる田老湾だが、それらを加工する施設は、養殖ワカメに代表されるように田老町漁協のみで、民間の産業はほとんど育っていない。宮古市街に水産加工業が発達しているので、そこに運べば済むからだ。

だが、新工場稼働をきっかけに、これまでできていなかった水産加工品の商品開発に踏み込み、田老地区ならではの商品を作るのが夢だという。

#### ◆モノだけではない、深刻な人の問題

「震災をきっかけに、もうワカメの生産はやめてしまおう、そんな組合員は数多くいました。以前ならば沿岸近くに住み、収穫するとすぐに自分で仕立てて（茎部分を切って選別すること）、再び収穫に出ることも簡単でしたが、仮設住宅に住むようになるとそれも難しくなりました」（鳥居さん）

ひたすら海上の養殖施設を設置し、船を手配。一方、陸上では加工場を建設し、設備を整えてきた鳥居さんら田老町漁協。現在、生産は養殖ワカメで7割、全体で約6割まで回復した。

だが、もうひとつ大きな課題があった。「人の問題」だ。

田老町漁協の組合長、小林昭榮さんを筆頭に、鳥居さんら田老町漁協の職員は、2011年4月から座談会を開いてきた。震災をきっかけに仕事をやめてしまおうと気持ちが傾いている組合員を懸命に説得してきたのだ。

だが、震災前、97人いた養殖ワカメの生産者のうち、結局、養殖を再開したのは67人。30人は戻らなかった。物的な被害の大きさと、生産者の激減にもかかわらず、1年後のワカメの生産量が例年の7割に達したことが、どれほど大きな成果だったのかが改めてわかるだろう。

組合員減は養殖ワカメの生産者に限らなかった。田老町漁協全体では700人ほどいた組合員は、現在は585人まで減っている。全体で、120人以上、2割近くが減ったことになる。

この先、さらに生産を伸ばし、せめてもとの水準にと考えても、人がいなければ難しい。

一番の理由は、海から遠い仮設住宅に住まざるをえなくなったことが大きい。漁に出るにも、ワカメなど養殖の作業を行うにも、港付近に住むのが便利だ。ボイルや乾燥機など設備を所有していれば、やはり海の近くでなければ作業は難しい。

船の問題はかろうじて解決した。

すでに触れた通り、生産者の人たちは田老町漁協の組合員ではあるが、一度海へ出てしまえば、自分の腕で収穫する一国一城の主だ。仕事も個人所有の船があることが前提で成り立っていた。

たとえばワカメの養殖であれば、人によって手間のかけ方は全く違う。海中の栄養分は水深で変

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

わることがあり、しかも時期によって変化もする。海況が良い時は海に出て、ワカメの育成具合を見ながら、ロープの貼り具合を調整してワカメの漂う水深を調整する生産者もいれば、あまり関心を払わず自然に任せ、作業を最小限にとどめる人もいる。

ウニやアワビ漁になれば、さらに個人の違いがはっきりと出る。1日に数百万も稼ぐ人がいる一方で、数万にとどまる人もいる。獲る漁場や手際の鋭さなどで収穫は大きく差が出るのだ。

個人の努力や長年の経験、技術の差が現れるところが漁業の醍醐味であり、それを味わえるのは自分の船があってこそのことだった。

その船が震災でほとんど失われた時、田老町漁協では残ったわずかな船や、依頼しても建造が追いつかず、わずかに建造された船を、共同で使うことを提案した。2011年は止む無くそうせざる終えなかったが、腕の良い生産者になればなるほど、不満が募ることになった。

幸い、震災から1年半が過ぎた2012年夏までには、船の数はもとの水準まで戻すことができた。漁協が購入し所有も漁協になるが、5年後には一部の負担で組合員の所有に変える計画だ。

船と船外機、漁のための道具が一式つく。所有の問題は先延ばしになったが、一応、個人で使える船が揃った。だが、この1年半の間に待てずに漁業から遠ざかった人も少なくなかったに違いない。

道具が揃っても、漁が元通りになったわけではなかった。それも不安材料だ。

腕の見せ所と意気込んで臨んだ2012年夏からのウニの収穫は、例年の1%ほどにとどまった。時化のために海へ出られる日がわずか2日しかなかったためだ。例年ならば10日以上はある。

「海藻が多すぎるという問題も出てきました。海の底が見えない」（鳥居さん）

震災の影響なのかどうかは不明だが、いずれにせよ、腕が鳴っていた生産者にとっては落胆する結果になった。

2012年11月からはアワビの漁が解禁になった。今度こそと意気込むが、こちらは震災のため、昨年と今年は稚貝の放流はできなかった。

稚貝を施設で育てて放流し、それが3~4年経って育ったところを収穫する。育てて獲るというサイクルを維持すれば、資源は枯渇することはない。だが、田老町漁協では、主力である養殖ワカメの復旧を急いだため、アワビの稚貝の種苗生産施設の復旧は間に合わせることはできなかった。2年連続で稚貝の放流がなかった影響は、数年後に現れるだろう。

さらに時間を置けばもとの水準に戻すことはできるだろうが、その時まで人が待ってくれるかどうか。

これらは震災によって引き起こされた問題だが、もともとの地域で顕著だった高齢化と人口減、後継者難という問題があり、それをさらに深刻化させてもいる。

「働いていたところがいつ再開するのか、その見込みも立たない。となると宮古（市街）のほうに働きに出る。人は減っています」（鳥居さん）

町の復興が長引けば長引くほど、しびれを切らして田老地区以外のところへ出ていく人は増え、残るのは高齢者の夫婦や一人暮らしの人だけだ。高齢化、人口減に拍車がかかっている。

鳥居さんら田老町漁協が設備や生産体制の復旧を急いだ本当の理由がここにあった。漁業ができない期間が長引けば、高齢なので引退しよう、後継ぎもいないから、と、漁業をあきらめてしまう組合員は増える。

## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

設備や体制の見通しがつかなければ、人の気持ちも離れてしまう。逆に設備や生産体制が整う見通しが立てば、それまで何とかガマンできる人も増えるだろう。そう考えたのだ。

根本的な解決は、町の復興計画を待たねばならないが、それは生産者1人ひとりにとっても、また、田老町漁協にとっても、あまりにも大きな課題だ。

先の見えない悩みや焦りがあり、それに設備や体制の不完全さからどんな不具合が飛び出すかわからない不安が加わる。それ以前に、家族を失った人にとっては深い悲嘆があり、簡単に拭うことはできない。

ガレキは片付き、一見、平穩になったかのように見える被災地だが、地元の人たちにとっては、悲嘆、悩み、焦り、不安が何重にもなっているのしかかっている。それでも毎日の仕事をこなしていかなければならない。支えになるのはそれでも少しずつ見えてくる将来の町の姿と自らの気力だ。

#### ◆混沌の中で見えてきた小さな希望

不安定だからこそ、少しだけ見えてきた希望は大きく見える。

「待っていた。でも、高い。でもやっぱり美味しい（笑）。そんな声をいただきました」（鳥居さん）

2012年3月、震災後、やっとの思いで収穫することができた養殖ワカメ。田老の海域で獲れた「真崎わかめ」は、地元のいわて生協をはじめ、得意先へ送られ、そんな声をもらったという。

2011年、ワカメは収穫直前に被災し、そのため全国のファンたちは、まるまる1年を待たされた。2012年春、やっと手に入れることができ「待ってました」とさっそく購入したが、三陸ワカメはどれも品薄で高騰し「高い」という感想は避けられなかった。だが、食べてみると「やっぱり美味しい」。値段の高さも納得させるだけの歯応えと味に、長年のファンたちは満足した。

主な販売先は県内だが、個人で購入する顧客もおり、送り先は東京など関東をはじめ全国に及ぶ。

現実には、2012年、新しく出回ったワカメは高騰のため、田老町漁協での取引先は半減した。震災後に安い外国産が出回った影響も大きいようだ。価格差は最大で5倍にも及ぶ。一度、離れてしまった取引先を取り戻すことは容易ではない。

だが、そんな中でも、2012年は新たな注文主が現れた。

「地元の復興のためにがんばりましょうということで、商品を扱いたいという会社がいくつか立ち上がったようです。県内ばかりでなく首都圏のいろいろな物産展にも品物を運んで販売してもらっています」（鳥居さん）

「復興支援」をかかげて全国の物産展で販売したり、ネットで通販する企業が現れた。

取引には直接関係はないが、震災をきっかけに田老地区を知る人が全国に増えたことも、希望のひとつだ。

防潮堤の視察に訪れる見学者がひっきりなしだ。ツアーのように大型バスで乗り付けることもある。

田老町漁協に見学者も多い。いわて生協が支援の目的でたびたび訪れているが、ほかにも小中学校の児童・生徒たちが訪問し、ワカメの芯取りの体験をしていく。学校の職場体験学習のためだ。

地元・宮古市内の小中学校からの訪問では、100人単位が参加する時もある。そのため、田老町漁協では、いくつかのグループに分けて、ワカメの芯取りの体験と、震災の話を交代に行い、子ど



## 【復興の現状とまだ見えてこない街と産業】

### 岩手県宮古市：田老町漁業協同組合

もたちに普段の仕事と震災の体験の両方を伝えている。また、同じ県内だが、内陸の盛岡からバスで3時間かけて来る学校もある。

高校からは学校祭の企画にと、ワカメをはじめ田老町の商品の注文が入るようになった。模擬店で売らしい。こちらも宮古市内の高校が主だったが、県内、さらに遠く岐阜県からも注文が来た。

「価格が落ち着けば、また、取引はしやすくなる。次の年もそのまた次の年も少しずつでも注文を増やすことができれば、それが希望になる」と鳥居さんは語っている。

2012年は価格の高騰が壁になったが、三陸全体の生産体制が整い出荷量が安定すれば、価格も安定し、新たな企業にとってよりビジネスがしやすくなる。

「少なくとも震災をきっかけに、田老を知る人が増えていることは間違いないでしょう」（鳥居さん）。

きっかけは震災だが、とにかく町の名は知られるようになった。したたかにそれも利用して、ワカメをはじめ、田老自慢の新鮮な海産物、加工品の良さを伝えたい。震災の記憶が薄れた時、商品の品質で勝負できるようにしたい。

そして若い人たちの参加。それがもうひとつの希望だ。

養殖ワカメの生産者の人数は97人から67人に減ったが、中には新しく加わった3人もいる。いずれも20代、30代の若い世代だ。田老町漁協の組合員の平均年齢が60歳近くになり、70代の生産者も少なくない中、若い世代の登場は、地元の漁業にとって明るい材料だ。

漁業の経験のない人もいた。そこで初めは漁協の自営定置網の船に乗って仕事を覚えてもらい、その後、定置網の時期が終わった後は、養殖ワカメやコンブの生産に携わってもらう。次の年、定置網の時期になればまたそれを繰り返す。

「定置漁業に乗る人たちは朝早い。たとえば朝の2時に起きてまだ暗いうちに出港していく。水揚げは朝の5時ぐらいで、あとひと作業してご飯を食べても、多分昼の12時頃で作業は一旦終わります。午後は空きますから、その間を利用して養殖の準備をすることは可能なんですよ」（鳥居さん）

定置網と養殖をサイクルにしていけば、効率良く漁業を覚えられる。

「皆、今一生懸命勉強中です。結局教える人もいなきゃなんないし。だから先輩から多分色々指導は受けてると思いますね。ほとんど先輩っていても、親戚とかそんな形にはどうしてもなっていくんですけどね。でも、厳しいだろうね。結局、なんでもそうだけれども体が資本ですよ」

大変だが、期待は大きい。

2012年、田老町漁協にも若い3人の新人の職員が入った。

「震災で帰ってきて、復興のためにがんばりたいと言ったのがこの3人。そんな気持ちを極力汲んで採用しました」

宮古出身が2人、田老出身が1人。苦しさの中で見えてきた希望、町を変えていく希望だ。